

夕月夜 心もしのに

白露の 置くこの庭に 蟋蟀鳴くも

(湯原 王 巻八・一五五二)

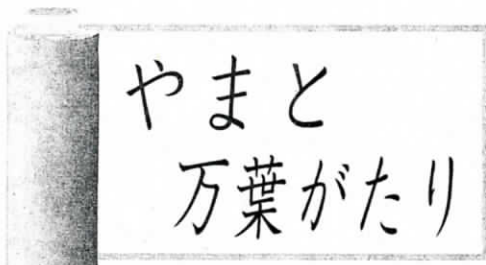
ませんが、秋の訪れを告げる美しい鳴き声として好まれ、とくに愛でられていたことがうかがえます。

9月に入り、朝晩が過ごしやすくなってきました。夕風とともに秋の虫たちの声が涼気を運んでくれます。

1年を約15日ずつ24期に分ける二十四節気では、ちょうど今ごろ、夏から秋へと季節が移り変わる時期を白露と呼びます。夜露が凝って白く見える時期とい

う意味で、そうした現象がみられるのは秋の陰気が夏の陽気に交わる時とされました。現代では、期間ではなくその初日を区切り目として呼び、それが毎年9月8日ごろにあたります。

「白露の置く」という表現は、現代日本語の感覚からみると違和感があるかもしれませ



んが、古くは露や霜がおりることを「置く」といいました。

『万葉集』には「蟋蟀」を詠んだ歌が7首ありますが、もともと『詩経』や『文選』などの中国文献にみられる語彙であり、『万葉集』では漢語そのままの表記を用いたようです。一字一音の表記例は無く、どのように訓

んが、古くは露や霜がおりることを「置く」といいました。『辞書』である『和名類聚抄』に「蟋蟀」の和名として「古保呂伎」と記されており、5・7・5・7・7という短歌の音数にも合うことから、「こほろぎ」と読んでいたと考えら

れています。ただし、同書には「蟋蟀」の和名は「木里木里須」ともあり、現代でいうコオロギやキリギリスなど秋の虫を広く指す語であったとみられています。

【訳】夕月の照る夜、心もしなえるように
白露の置くこの庭に、蟋蟀が鳴くことよ。

「しのに」とは、草木がしおれてなびくさまから転じて、心の状態をも表しました。夕暮れの月に白露が光る季節に、独り静かに虫の声に耳を傾けている貴人の様子が目に浮かびます。
(県立万葉文化館企画
・研究係長・井上さやか)

奈良山の 兎手柏の 両面に

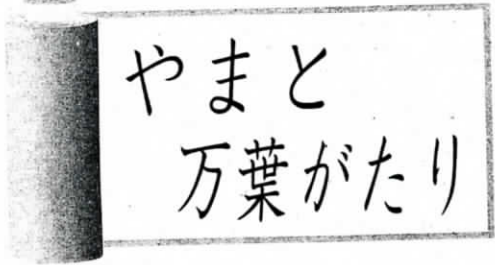
かにもかくにも 佞人の徒

消奈行文(巻十六・三八三六)

この歌は、口先巧みにあちこちで従順を装うような「佞人」を、表裏面がよく似ており見分けがつきにくい兎手柏の葉にたとえて詠った歌です。『万葉集』巻十六「由縁ある歌」(いわれのある歌)の部に収められており、歌にまつわる物語や背後事情がある歌として分類されています。

この歌に関する事情

とは、作者である消奈行文の出自と官職に深く関わるものです。消奈氏は朝鮮半島の王国高句麗を出自とする渡来系氏族です。668年に高句麗が唐の遠征軍によって滅ぼされた後、行文の父の消奈福徳は日本へ帰化して武蔵国高麗郡(現在の埼玉県日高市付近)に定住しました。高麗郡は716年に設置され



た郡で、関東地方一帯にいた高句麗系渡来人がここに集められました。消奈氏のような渡来人には大陸由来の知識を活かして学者になる人が多く、行文は武蔵から平城京へ上京して儒学を学び、明経博士(儒教の經典を教授する明経道の教官)として官僚育成機関である大学寮で四書五経などを教えました。学業

優秀による受賞歴や、外国からの賓客をもてなす宴会で披露した漢詩などが伝わっており、優れた儒学者として知られていました。

大学寮の博士として後進を指導していた行文の立場を踏まえてこの歌を見ると、人といふものは多方面にいい顔をする「佞人」であってはならないのだ、と学生を戒める歌として読むことができそうです。この歌に関する「由縁」としては、まずこの点が挙げられます。

しかし、祖国が滅んで日本へ逃れてきた渡来系氏族の一員が作った歌として見ると、また違った見方ができます。行文は父の福徳から祖国滅亡の様子を聞いていたはずで、一國が滅ぶ時に現れる裏切り者や売国者を憎悪していたのではないでしょう。そうした一族の経験から生まれた感情が、この歌にも反映されているように思えます。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

【訳】まるで奈良山に生えている兎手柏の葉がかびへつらう人よ。

が滅ぶ時に現れる裏切り者や売国者を憎悪していたのではないでしょう。そうした一族の経験から生まれた感情が、この歌にも反映されているように思えます。